
 学 会 記 事

第 56 回新潟化学療法研究会

日 時 平成 29 年 7 月 1 日 (土)
午後 4 時～5 時 30 分
会 場 ラマダホテル新潟
3 階 「明石の間」

I. 一 般 演 題

1 肺炎球菌に対する好中球オプソニン化食能の動画による評価法確立を目指して

山本 絢子, 川崎 聡, 本間 康夫*
田端 篤*, 阿部 徹哉, 青木 信樹
信楽園病院呼吸器内科
同 臨床検査科*

【背景】肺炎球菌は様々な部位で感染症を起こし、無菌的部位から肺炎球菌が検出された場合には侵襲性肺炎球菌感染症 (IPD; invasive pneumococcal disease) と呼ばれる。IPD は致死率の高い疾患であり、宿主に強い免疫応答を起こすことが知られている。病原因子はいくつか挙げられるが、最も重要な原因は莢膜で、ほとんどの肺炎球菌には莢膜が存在する。血清型として 93 種類が報告されているが、肺炎球菌は莢膜によって食食抵抗性を示し、そのためワクチンによるオプソニン化が重要である。

【目的】ワクチンによって産生された抗体を評価する方法に ELISA 法や OPA 法が開発されてきたが、ELISA 法は正確性に欠け、OPA 法は限られた施設でしか測定できない。当院で可視的に好中球オプソニン化食食能を評価できないか検討した。

【方法】13 価肺炎球菌ワクチン接種後 2 か月の健康なボランティアから血清を採取した。ワクチンと同一血清型である 6b 型の肺炎球菌あるいは非同血清型である 24 型の肺炎球菌をワクチン

接種後血清と 35℃ 15 分で反応させた。白血球浮遊液と菌液を等量混和させて、直ちに白血球の食食像動画を顕微鏡下で撮影した。

【結果】ワクチンと同一血清型の肺炎球菌は非同血清型の肺炎球菌と比較して食食像が活発であった。

【考察】本法では食食能が白血球に影響されるため、OPA 法のように白血球の質を均一化しなければ評価の正確性に欠ける。しかし動画は患者には理解しやすく、ワクチン接種の教育活動や普及には役立つ可能性がある。今まで食食能を動画で評価する方法は検討されたことがなく、今後食食能を定量化することが期待される。

2 Antimicrobial stewardship (ASP) により治療に成功した過粘稠性 Klebsilla pneumoniae による侵襲性肝膿瘍症候群の 1 例

田中 智¹⁾²⁾, 窪田 智之¹⁾³⁾
桶谷 典弘¹⁾⁴⁾, 廣川 幸子¹⁾⁵⁾
阿部 啓司¹⁾⁶⁾
新潟臨港病院 ICT¹⁾
同 感染制御認定薬剤師 (BCPIC)
抗菌化学療法認定薬剤師 (IDCP)²⁾
同 消化器内科³⁾
同 呼吸器内科⁴⁾
同 ICN⁵⁾
同 医療技術部部长兼検査科科长⁶⁾

Klebsilla pneumoniae は尿路感染症や肺炎の起炎菌として日常診療でよく遭遇する細菌の 1 種類であるが、同菌による侵襲性肝膿瘍症候群が 1980 年代より台湾を含みアジアで報告されている。中枢神経感染症や眼内炎を伴い、しばしば神経障害や失明など重大な後遺症を残す。病原性の強さはムコイド産生型の過粘稠性 K.pneumoniae 株との関連が示唆されており、細菌検査室での平板培地上のコロニーで過粘稠性を確認する、String test が有用である。当院でも過粘稠性 K.pneumoniae による侵襲性肝膿瘍症候群を経験したので、報告する。また医師、薬剤師、検査技師の連携により治療を完遂することが出来た。併せて当院における Antimicrobial stewardship